

<穴>としての「つちのいえ」

造形計画研究室准教授 井上明彦

1. 「にそと」と大枝アートプロジェクト

2012年秋現在、芸大敷地のすぐ西側で、「にそと＝京都第二外環状道路」の沓掛インターの工事が急ピッチで進められています。航空写真(図1)で見ると、みどり豊かだった西山のふもとは、もはやかつての面影はありません。左手に芸大のグラウンドが見え、そのすぐ上の小さな森の中に、私たちが制作している「つちのいえ」の屋根が小さく見えます。音楽棟南側のこの丘には、芸大がこの地



図1) 沓掛インターチェンジとつちのいえ、2012年秋

に移転する以前の原地形の名残があります。古い記憶を宿した微地形の上でゆっくりと進むつちのいえの手づくり作業は、風景を激変させつつ急速に進行する巨大テクノロジーによるインターチェンジの建設工事と、強烈な対比を見せています。

つちのいえの萌芽は、この建設工事で消えた大枝の風景の芯のなかにあります。いわゆる柿街道沿いにあった江戸時代から続く大藪家の古い素朴な土塀がそれです(図2)。傍らに石灯籠が立ち、山のふもとの九社神社へ通じる参道の起点をかたちづくる土塀は、柿街道の緩やかな坂の勾配の頂点、峠ともいえる場所にありました。



図2) ありし日の大藪家土塀 2005/5/12撮影

芸大の西から南にかけて広がる大枝・大原野には、京都市内ではまれな美しい里山の風景が広がり、戦前、河井寛次郎が来日早々のシャルロット・ペリアンを案内したほどです。長岡京から西山沿いの街道を歩いて芸大に通う私は、2004年秋、その里山の風景が、まもなく始まるにそとの工事で数年後には消えてしまうことを知りました。同年、私の担当する授業「造形計画」で、さまざまなアプローチによって大枝の

「ひと・もの・こと」を記録／表現する試みを始めました。その成果の展示場所として、地域に残る土蔵を学生たちと一緒にリノベーションしたのが、授業から独立して広がる「大枝アートプロジェクト」の始まりになりました。

大枝アートプロジェクトは、さまざまな公私の助成や地域住民の協力を得ながら進められました。根底にあったのは、風景とは何か、ひとと風景の関わりをなかで美術



図3)「峠の茶屋計画」2008/7/21

に何ができるのか、またそのなかで美術はどう変わりうるのかという問いかけでした。2008年7月、プロジェクトに関わる学外の美術家や造形計画の受講生たちといっしょに「みどりの停留所」という展覧会を、工事現場を含む大枝・大原野の風景の中で開催しました。テーマは「高速道路ができてしまうともはやそこで人は立ちどまれなくなるから、今のうちに立ちどまりたい風景のある場所に作品としての停留所をつくる」ということでした。私は、出した課題はできるだけ自分でもやる方針なので、国交省との交渉や広報デザイン、学生指導の合間をぬって、出品者の一人として、「峠の茶屋計画」と題した停留所的な小屋を大藪家の駐車場に即興的につくりました。それは、「解体が決まった大藪家の土塀を逆に延長すること」を提案するものでした。材料は、次々と壊されていく付近の民家の廃材を使い、屋根テラスに上がって峠の風景を眺めることができました(図3)。

2.「峠の茶屋」

「みどりの停留所」展の際、作品に焼板を使いたいという学生に、バーナーで焼かず三角に板を組んで内側を燃やす伝統的なやり方を教えたところ、予想以上にきれいに焼け、伝統技術のすばらしさへの関心が広がりました。漆喰仕上げもない大藪家の土塀が、土団子を積み上げただけの練り土積みという原始的な工法でつくり、阪神大震災も耐えたことへの驚きもあったようです。展覧会終了後、私の小屋の解体を手伝ってくれた学生たちのあいだから、伝統技術を学びながら土塀延長を実現したいという声があがりました。学生は日本画、彫刻、漆工、構想専攻の4名です。大藪さんの許可を得て、同じ場所に「峠の茶屋」を再度つくる作業が夏休み中に始まりました。当然、学内授業とは無縁の自主プロジェクトでした(図4)。

学生たちと作業しながら、私は、伝統技術のもつ知恵へのアクセスが美術から欠落していること、それは私自身にも当てはまることをあらためて思いました。それで私は、学生自身が授業をつくれる「自由テーマ研究」という枠のなかで作業を続



図4)「峠の茶屋」制作風景 2008年秋



図5)「峠の茶屋」お披露目茶会 2009/4/19

けてはどうかと提案しました。重労働を続ける学生たちの励みになるし、他の学生たちにも開かれたものになるからです。単位がとれるようにすることで、大事なものを失う危険も覚悟のうえです。かくて学生提案による自由テーマ研究「自然建築研究」が2008年度後期からスタートしました。授業にしたことで海外留学生を含む新メンバーも加わり、彫刻の小清水漸先生(当時)には顧問就任を快諾いただきました。

土堀を延長するには、土をどこかで調達する必要があります。たまたま旧山陰道の工事があり、私たちの作業を見知っていた土木作業員から、現場の赤土を1トン土嚢4つに入れて分けていただきました。一方、芸大の設備棟の方々からは、日干しレンガづくりのための作業場所を提供いただきました。土に混ぜ込む藁、竹小舞のための竹も、地元の方から頂戴しました。培われた

人と人のつながりがあれば、材料や場所は、お金がなくとも循環していくのではないのでしょうか。

そもそも土は、人為的に焼いたり汚したりしない限り、無限に循環再生が可能です。この無限性の実感、地球とじかにつながるような、目の覚める感覚を与えてくれました。また作業していると、地元のお年寄りがやってきて、石の積み方や藁縄の編み方を教えてくれたり、子供たちが土練りに参加したりします。作業現場が、世代・領域を越えたさまざまな知見と感性の交流の場になるのです。それは、素材や技術、さらには人や社会をしぼる「価値」というものを、一から捉え直す現場の生成でもありました。

他方、授業の枠に入ったことで、作業は原則1週に1度、木曜午後のみとなり、ゆっくりした歩みになりました。峠の茶屋は、翌2009年春に完成し、近所の方たちを招いてお披露目茶会を開催しました(図5)。その後の1年間、お茶が出るわけではないにせよ、バスを待つ人の休憩所や、地蔵盆の映画会などに使われました。

3. 敷地開拓・つちのいえの作業構造

同じ4月、今度は学内に土で「いえ」を建てるべく、継続して自由テーマ研究「つ

ちのいえ」を始めました。参加する学生は
一挙に15人と3倍に増え、なかでも日本
画の学生が最多の8名を数えました。小清
水先生に加え、秋山陽先生、長谷川直人
先生、栗本夏樹先生も参加下さいました。

最初に取り組んだのは、敷地の選定で
す。幸い資金不足のためか、音楽棟の野外
ステージの南の丘の上に、藪の密生する放
置されたような土地がありました。人の寄
りつかないその場所は、いわば管理の「穴」
でした。草を刈り、土を取り除くと、直径
8mほどの円形の石の基壇が現れました
(図6)。昔のキャンパス造成のときに花壇で
もつくろうとしたのでしょうか。とにかく
その基壇は、ここ以外につちのいえの場所
はないと思わせました。音楽学部には許可を
とりつけ、総務課からは授業が終了しだい
原状復帰という条件で許可を得ました。

さっそく杭を打って水準を出したり、土
が足りなくなったので、9号線沿いの工事
現場に取りに行ったり、小舞や壁の骨組み
に使う竹を京大桂キャンパスの竹林に切り
出しに行ったりしました。また道具置き場
兼談話室としての作業小屋を学内から集め
た廃材でつくりました(図7、8)。

開拓団のようなこの時期の作業は、与え
られた材料と設備ですぐに作品制作に取り
組める芸大の教育環境とは正反対の位相にあります。当然、半年というカリキュ
ラムの枠に収まる作業量ではありません。しかし、制作以前の材料と場所の調達や仕
込みを制作と同等に重視すること、授業の形式を採りながら内実は授業を越えて作
業を広げることが、重要かつ必然でした。というのも、自然素材を自らの手で入手
するためには、例えば藁であれば秋の収穫後というふうには、作業工程を教育カリキュ
ラムではなく自然のサイクルに合わせなければなりません。その向こうに、学び
とるべき自然の摂理に結びついた伝統技術の粋が、人間中心主義の美術から失われ
たものづくりの作法があるからです。

また、入手できる材料の種類と量が未確定で、既製材料を買うことも拒絶してい



図6) 敷地開拓 2009年4月



図7) 9号線沿いの工事現場で土1.5tを集める



図8) 京大桂キャンパスから竹を調達する

たため、全体の設計図をつくることも不可能でした。参加者それぞれでマケットをつくりましたが、いい材料を入手したらたちまち計画は変更されます。通常の美術や建築のように、全体のイメージやコンセプトが先行して材料や部分のあり方を決めるのではなく、入手した材料と参加者相互のやりとりの中から、そのつど未知のイメージや構造が立ち上がることが自然と重視されるようになりました。作業は、複数の参加者・部分・材料のたえざる相互触発のなか、完成予想図のない絵を描くように紆余曲折しつつ進行していきます。私たち教員は、その遠回りなジグザクのプロセスを導くのではなく、支え、後押しするだけです。授業として半期だけ履修した学生には、先の見えない作業の意味がわからず、フラストレーションを募らせたとと思います。

4. 三種の土壁づくり

決まっていたのは、柱構造の矩形の空間ではなく、円形基壇に合わせて直径約6mの円形の空間をつくること、土の建築の三つの主要工法を盛り込むことでした。竹小舞を用いた塗壁、土ブロックによる組積造、それに版築の三つです。版築は、真砂土を型枠に入れてつき固める古来からの工法で、法隆寺の築地塀などに見られます。学生の要望に応え、2009年の夏休み、版築を専門にする建築家・畑中久美子さんを招いて、ワークショップ形式でカウンター状の版築壁をつくりました。それには、支柱となる自然木を埋込みました。まだ壁も屋根もない状態でしたが、入口の予定地から奥に入ったところに斜めにふって位置を定め、右回りの内部動線を方向づけました。(図9、10)

2009年後期からようやく周りの土壁づくりを開始しました。彫刻棟から石の廃材を集め、壁の基礎として円形に積み並べ、大原野の大工さんからいただいた未製材の自然木の柱を立てました。次に壁土づくり。刈り入れの終わった大原野の田んぼに藁を集めにいき、数センチに切って土に混ぜ、足で捏ねます(図11、12)。次に土ブロックをつくるのですが、最初は手でやっていました。当然時間はかかるし、形



図9) 版築ワークショップ 2009/7/23



図10) 版築壁と柱の位置決め

やサイズにバラつきがでます。まもなく型枠をつくり、型による材料の標準化がいか
に作業効率をアップさせるかを痛感しまし
た。人類史的に型枠の出現が最初の土壁の
登場から約千年以上後のことだとすれば、
私たちは千年をワープしたことになります。

南壁を土ブロックによる組積造としたの
に対して、丘を上って来た人を迎える北壁
は、竹小舞を下地にした塗壁にしました。
竹小舞はふつう一重ですが、土を節約しつ
つ壁厚を出すために、あいだを中空にし
た二重竹小舞という独自の工夫を編み出
しました。塗り残しによる下地窓ならぬ「穴
窓」の位置にもこだわりました。他方、土
落ちを防ぐため、竹小舞全面にビッシリ
とシュロ縄を巻き、また土浮きを抑える
ために、独自のヒゲゴをつけました(図13、
14)。この壁は翌年に上塗りしましたが、
念入りな下地づくりのおかげで、2年後
の今もまったく剥落していません。

これらは伝統技術を学びつつ、独自に
応用変形したものです。専門家から見れば
笑止かもしれませんが、すでに定まった「
正しい」技術を踏襲するのではなく、自
分たちで初めからやり直し、問題に直
面して工夫することで、技術の必然と別
な展開可能性に思い至ることも大事と考
えます。

この点は、のちに著名な左官職人・久
住章さんを招いたワークショップで、久
住さん自身からお聞きしたことであり
ます。伝統技術は細かい取り決めが多
く、それをマスターして遵守しないと
いけないと思われがちだが、素人の発
想や試行錯誤がもたらす技術の見直
しや新しい視点なくして、伝統は生
き残れない、と久住さんは言いま



図 11) 大原野の田んぼで薬を集める



図 12) 足で土と薬をこねる



図 13) 二重竹小舞の全面にシュロ縄をまく



図 14) 左官に着手する 2010/1/14

す。伝統を守るためにこそ、「正しい」技術を押しつける「正統性の権力」に注意が必要なのです。

5. 土の救出と「アクアカフェ」

2010年春、ついに大藪家撤去が連休明けと決まり、それに先立って「峠の茶屋」を解体しないといけなくなりました。4月17日、おごそかに解体の儀式を行ったあと、丁寧に建物を分解しました(図15)。

土による一連の作業を通して、私たちは、創造と解体は対立するものではなく、循環関係にあることを知りました。解体は同時に新しい素材の出現であり、次の創造への入口です。言い換えれば、人間にとっては、茶屋の形態は消滅しますが、土にとっては、人間に与えられた形態から解放され、新たな可能性の次元に移ったにすぎません。この認識は、「壊される大藪家の土塀と壁の土すべてを救出し、無限に再利用する」という試みに私たちを導きました。

大藪家土塀は二つあり、参道側が長さ約14m、高さ約1.2m、道路側が長さ約6m、高さ1m弱、厚みは共に25～30cmで、土の総量は約 6m^3 、比重2と見積もっても総重量約12t、さらに家屋や屋根の土も加えると相当な量になります(図16、17)。じつはその年、私は、京都国立近代美術館での「Trouble in Paradise/生存のエシックス」展で、琵琶湖疏水をテーマにした「アクアカフェ」をつくるため、大量の土を必要としていました。学内のつちのいえもそろそろ土が不足してきていたため、大藪家の土をすべて入手しておけば、将来的にも安定した供給が見込めると思ったのです。

「すべての土を救い出したい」という私の無謀な願いに、大藪さんも解体を受け持つ工務店さんも快く応じて下さいました。大枝アートプロジェクト以来の交流の



図15)「峠の茶屋」の解体と材料回収



図16) 大藪家土塀の土の救出作業 2010/5/27



図17) 土回収の重労働のあいま、土囊の上で

賜物です。とはいえ、人力で12t以上の土を袋詰めして運ぶ作業は並大抵ではありません。その年たまたま受講生が多く、人手があったことは幸いでした。結果的に、大藪家の門と土堀の土すべてを救い出し、400を越える土嚢に詰めて近代美術館に運び込み、疏水脇に「アクアカフェ」をつくりました(図18)。江戸時代に手で団子にされた土塊を砕いて、藁を混ぜて捏ね直すと、分解された繊維質も作用して、粘性の高いすばらしい壁土ができました。



図18) アクアカフェ、京都国立近代美術館前庭

展覧会終了後、「アクアカフェ」は「峠の茶屋」と同様に丁寧に解体し、すべての材料を芸大に持ち帰りました。土堀の土が破壊と創造を二巡して再資源化されたわけです。西門の脇に積まれた土嚢のピラミッドがそれです(現在半分使用)。

6. 茅葺き屋根



図19) 屋根の小屋組みをつくりなおす

「アクアカフェ」からつちのいえの作業に復帰した2010年秋、学生たちから、屋根は藁葺きにしたいという思わぬ要望を聞きました。

じつは、屋根の形状や工法が決まらないまま進んでいました。屋根は、建築を他の造形芸術から区別する技術的にもっとも難しい部分です。とりあえず、版築壁に埋込んだ自然木を大黒柱にしていたのですが、藁葺きにするなら、水はけのために屋根に

もっと傾斜が必要です。こうしてより高い第二柱を横に立て、小屋組みもやり直しました(図19)。困ったのは、屋根を葺く材料も技術も持ち合わせなかったことです。とりあえず大原野の田んぼに藁を集めに行きましたが、実際の作業をどうするか困り果てていました。

そんななか、伊勢神宮を含めた文化財の屋根の修復も手がけられるすばらしい茅葺職人さんと出会い、指導をあおぐことができました。私たちが材料を買わないことにこだわっていることを伝えると、どこでいつ茅が採れるか、どんな草が屋根に使えるかを教えてくださいました。知恵を得ると、たちまちまわりの環境に資源が満ちていることが見えてきます。お金とマーケットが、私たちと自然資源のあいだ



図 20) 茅葺き作業



図 21) 軒の刈り込み



図 22) カンヴァス屋根を蠟引きする

の煙幕になっていたのです。また、屋根職人さんにはつねに屋根の斜面を流れる雨のイメージがしっかり見えていることも驚異でした。伝統技術とはまずもって自然と渡り合う技術であることを痛感しました。

冬の終わりに西山に茅を集めに行きましたが、一度集めたくらいでは足りず、半分だけ屋根を葺いた状態が一年以上続きました。また私たち自身が藁で葺いた部分は、一年後、大きな凹みができてしまいました。結局、職人さんの指導のもと、2012年夏、一部を残して茅を全面的に葺き直しました(図20、21)。

できあがった屋根はじつにユニークです。中心軸がずれ、かつ軒の高さがそろっていないのに屋根勾配をそろえるという矛盾が、内なる動きに富んだ不穏なフォルムを生んでいます。加えて茅不足を補うため、一部に廃材と廃カンヴァスを用いたハイブリッドな構成です。絵具をぬぐったカンヴァスは採光を兼ね、外面には土を膠で溶いた絵具で制作工程を14の場面に分けて描いています。防水のための蠟引きには、染織の三橋先生に指導いただきました。専攻を越えたおらかな交流がある京都芸大ならではのことで(図22)。

7.<穴>としての「つちのいえ」

2011年度からテーマ演習に自由テーマ研究が統合され、学科系の研究発表だけでなく、実験的な制作研究も行えるようになり、つちのいえもテーマ演習になりました。とはいえ、学部授業として閉じているわけではなく、折りにふれて開く茶会やワークショップ、展覧会や音楽会などのイベントには、卒業生も音楽学部の教員や学生も地域住民の方々も参加します(図23)。

つちのいえには、これまでチュニジア、台湾、韓国、中国からの海外留学生が

参加しており、異なる住文化の要素も入り込んでいます。竹を壁に埋込んで窓にした部分は、丸太を埋込む韓国の土壁のアイデアの転用です。私が西アフリカと交流していることも反映して、ひとつのイメージに納まることを拒む無国籍な気配があります。丹波や常滑などの国内研修はもちろん、2012年9月には、参加者の一人の故郷・中国の内モンゴル自治区に研修旅行に行きました(図24)。国宝の待庵、秋野不矩先生ゆかりの矩庵にも研修に行き、真の伝統がもつ生き生きした実験精神に触れることを忘れないようにしています。

つちのいえは、管理の「穴」にできたと書きましたが、それ自体が芸大の「穴」のようです。この穴は、地域社会や日本の伝統技術だけでなく、中国やアフリカにも、また数千年前の世界にも通じています。なぜなら、自分たちが住む大地の材料である土で家をつくるというのは、太古から続く人類普遍の営みで、あらゆる造形活動の母胎だからです。この穴を通して私たちが遠出したいと思っているのは、芸術と文明を別な視点で眺めるための「原野」なのです。この穴は、手探りの創作活動を通してのみ維持できます。私は、京都芸大にたくさんの穴ができればいいなと思っています。というより、つちのいえを認めてくれる京都芸大それ自体が、すでに芸術の風穴であればと願っています。

* つちのいえブログ <http://plusap.exblog.jp/>
 * 大枝アートプロジェクト
<http://w3.kcua.ac.jp/oap/>



図23) たまご茶会:中村典子作曲「つちのいのり」初演、コントラバス:赤松美幸、2012/2/12



図24) 内モンゴル研修旅行にて 2012/9/6



図25) 屋根裏を見上げる 2012年10月現在